説教要旨『灯台下“暮らし”』

申命記 30 章 6～14 節

ある研修会に、毅然とした雰囲気のカトリックのシスターが参加されました。ほかの参加者が様々に痛みや弱さを分かち合うなかで、シスターはとくに記憶に残る挫折も後悔もなく、どんなに心を探ってみても痛みがないと胸を張っていました。ほかの参加者が嘆き、もだえ苦しみ、寄り添い寄り添われ、やがて十分に泣いて気の晴れた子どものように笑顔を取り戻した頃、思いがけずうちひしがれていたのはシスターでした。そして、彼女はこう言いました。「私には人の痛みがわからないことが分かりました。それがはじめて知った挫折です」。

本日の箇所で、モーセは「（神の）御言葉はあなたのごく近くにあり…それを行うことができる」（14 節）と語っています。そして、「行うことができる」のは、神が私たちに「できるようにしてくださる」（6 節）からだと言います。例えば、モーセは「安息日」の掟について、「あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。あなたは、かつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない」（5:12～15）と伝えています。要するに、あの奴隷であった時代の苦難とそこから解放される喜びを経験した今のあなた方なら、奴隷が主人に何をして欲しいのかが分かるはずだ、この安息日の大切さが分かるはずだ、この御言葉を行えるはずだ、そう働きかけているのです。

「灯台下暗し」とは、身近なことはかえって気付きにくい人間の姿を言い表した諺ですが、実際に「灯台下で暮らし」てみないと身近なことは気付きにくいものです。灯台下は暗いのですから、そこには経験したくはなかった闇があるかもしれません。しかし人は、生きていれば否応なく、その灯台下に連れて行かれて、闇に覆われるような経験をしていきます。でも、その経験を通して初めて、そこで苦しむ者の痛みが何であるかを知り、その闇のなかであなたを向こう側から照らしてくれる別の灯台の存在を知ることになります。その灯台は、当たり前のようにして傍にいてくれた誰かかもしれません。いや何よりも、聖書の御言葉が、行くべき道を示す灯台として、私たちを照らし続けていてくれたことに気が付いていくのでしょう。そのようななかで、今度は自分が誰かの闇を照らす灯台へと変えられていくのです。

イエスが十字架にかかったのは、私たちが誰かを愛し、赦せるようになるためです。十字架の出来事は、イエスを裏切った弟子たちにとって暗闇の体験でしたが、それは同時に、彼らが主イエスの愛を知らせる灯台として立てられていくための体験ともなっていったのです。

（文責：望月達朗牧師）